

■1. はじめに

1. 経緯；地域においては「こうした方がいい」とか「ああればいい」とか思うことが多々あり、これらを提言として06年から少しずつ書き蓄えておりました。そうそているうちに5ケ年の区切りとして種々提案をまとめて提言集(その1)を11年に作ってみました。その後も、ふつふつと湧いてくる提言を蓄積し、かなりの分量となりましたので、あれから12年経過しましたが、11年の提言集の続版として取りまとめ提言集(その2)をまとめてみました。皆様、見ていただければ幸いです。

2. はじめに；改めて提言を書く気になった理由について

地域における呑み会や談話会において、いろんな方と自由闊達に話をするなかで、教育、子育て・子育ち、観光、農業などについて「地域はこうあったら」、「こうありたいもの」といったことで意見を出しあい、議論を楽しんでいたものです。

酒の力や会場の雰囲気のだと思うが、発言者は不思議といい意見を出せたと自身でもびっくりするほど満足することもしばしばです。しかし残念なことに、いい話をしたという記憶は残っても、具体的にどんな内容かと思返しますと「忘れた」ということも多いかと。私自身もそうです。

そこで、私は、自分の意見を忘れぬうちに書き留めておいて提言にすることにしているのです。提言というもののすごいことを書くものと思われがちですが、多くの場合は、何気ない発言の塊のように思ひまして、提言に力を注ぐことが楽しさ変わっていくことを実感しています。紙面や画面(CRT)を通して皆様と語り合う気分でもって執筆しております。

3. 構成

本稿で実際に扱った問題は次の通り。なお数字は執筆年月。

■2. 地域総合問題

<1>地域総合問題、県総合政策 16.11

■3. 人間育成

<1>. 子育て支援と少子化対策について 12.07

<2>. 子育て支援と少子化～子どもが育つ街 17.3

<3>. 青少年健全育成 17.3 <4>. 生涯学習 22.11

■4. 生活環境

<1>. 消費者問題～食の安全 16.12

<2>. 消費者問題～市民視点で 23.02

<3>. 福祉問題～高齢者とともに 12.04

<4>. 福祉問題～日常の意識 12.07

<5>. 福祉問題～幸せの実現に向け 16.10

<6>. 福祉問題～社会システムづくりの前段階 22.08

■5. 環境と街

<1>. 環境の保全と創造～市民と共に 12.07

<2>. 環境の保全と創造、地域にて 16.11 <3>. 水環境

22.10 <4>. 雪問題 12.08

<5>. 農環境について 11.8

■6. 文化、学術

<1>. 文化～文化財保存と活用 12.07

<2>. 文化～文化の香りの醸成 16.3

<3>. 文学館 16.10

<4>. 立山博物館

■7. 健康、食

<1>. 食育について 11.8 <2>. 歯の健康 19.12

<3>. スポーツ 11.09

■8. 他 <1>. 動物愛護問題 17.5

■2. 地域総合問題 16年

富山県では、県政に有識者の見識や市民の声の反映として、種々問題毎に審議会や検討委員会が設置されている。市民の立場からいえば、県政に自身の声を届けるには、各種問題に対してのバブコメ提出や各種委員会の公募委員での発言、県主導の市民向けWSへの参加がある。編者自身も、何かにつけて機会あるごとに発言している。そのうちのひとつとして、県の総合計画について意見を提出した。ここに述べる。

<1>地域総合問題、県総合政策 16.11

「概ね10年後の県を展望し、元気な県づくりを進めるための方策について」

これまで実践してきた街づくりや文化財保全の活動をもとにして県の総合計画について施策提案とする

△ 県の将来については、これまでの風土や県民性を受け継ぎ発展させながら築くものとする。ここでは、何をどう受け継ぎ発展させるかという問題設定で、元気づくりの県については(多くの問題のうち一番大事な)人間に着目して県民性(意識)の熟成を如何に図るかという構想を述べることにする。

△ まず意識に着目する理由を二つ述べる。第一には、将来の県において観光や工業など産業の一層の振興には技術開発や種々システムの整備・構築もさることながら、人間性を問う時代的風潮が日増しに強まっていること。第二には、そもそも県民あつての元気な県があり、そこには物質的豊かさでなく精神的豊かさの追求を目指すとして、県民の意識の醸成が求められていること。ただし、意識は変革ではなく醸成にあることを付記しておく。

△ 次に、県民の意識を述べる。富山は、これまで海と山の恵みを受け、幸がいったい土地柄であり、勤勉で忍耐強く、地元を愛し、人を愛しみ、自然との調和を感受性においても感性においても、楽しんでいる。しかもそこには富山独特の奥ゆかしさの文化も脈々と流れていて、「自分をへりくだって相手を持ち上げる気遣いがあり、例えば、富山の観光地を「たいしたこと無い、普通、どこにでもある」と言ったり、講演会では質問せず(自己主張を避け)「自分よりも他者に発言機会を与える」といったことがあげられる。こうした意識を都会からは富山県民の偏屈さと揶揄されているが、そうではなく奥ゆかしさそのものである。こうした意識が都会風の意識の影響があつたとしても、未来への継承・発展されていくことになる。

△ では意識醸成をどう進める。これには日常生活の充実を図るしかないとする。まず、小学校区域や時には町内会レベル域としての(日常の)生活圏の設定と、そこにおける住民各位の本業や地域活動等営みを考えることにする。前者については、生活圏は程よい広さとなっており、後者については生活圏を超えて本業の行動圏が設定され、行動圏は生活圏を圏外から支えることにもつながるといえる。生活圏は、ほお

っておいても圏内では負担にならない程度(自然な状態での最適)なつながりが生じ、意識が時間をかけて醸成されることをもって、地域アイデンティティが形成されていくといえる。これより、街づくり、活性化、賑わい創成などのお題目を唱えなくてもいいと思う次第であり、県行政はそうした地域の動きを支援することで、県全体の意識から来る独自性が磨かれるとすべきであろう。

△ 以上のように考えて生活圏からの具体的方策を述べる。

(1) 街について：街での生活圏を確実なものにするために、小学校の空き教室を地域民のスペースに当て、周辺の公民館ともリンクして「集まる、集う、学ぶ、交わる、行動する」をいつでも実践できるように地域主導を目標化して実践する。

(2) 集落について：集落は集落として体をなさなくても大きな枠組みで周辺とつながればそれで十分であり、集落未満の集落(未満集落)があってもいいとする。富山県下全体で皆さんがつながっておればそれでいいのである。ただし、そこにはインフラはラインではなくパーソナル化が必要。

(3) 生活圏の整備：居住環境をもっと生き生きしたものにする。これには、空き家は観光で活用できるもの以外は壊して、再開発ではなく自然に戻す。草原や林に、もともと林を切り開いた宅地であれば林に戻せば十分。水田を宅地にしていたのなら、水田や草原に戻す。

△ 最後にまとめとして：人が意識においてみち足りて生活することが大事。ブータンのように、何も著名でなくてもいいのである。ごく普通を当たり前のように蓄積していくことこそ、明日の原動力となる。そんな10年後の県を見据えたいものである

■3. 人間育成

人間育成として子供環境問題、教育問題について、子育ての次元、青少年の次元、生涯軸の次元に分けて、健やかに人間が生まれ、活躍し、生涯を生き抜くといった問題について、見解を述べる。

<1>. 子育て支援と少子化対策について 12.07

△ 少子化や子育て問題においては、将来的な就業人口の減少による経済活動の沈滞化が未婚化・晩婚化につながり、出生率の減少や子供環境非充実となって現実化するために、子ども環境の充実に向けては(経済的な)育児支援を、また未婚化・晩婚化については婚活支援をといった政策が検討され実践されてきている。確かに、働く両親の子育て時間の捻出として育児休暇や休業に加えて最近では(労働)時短があり、保育施設の充実を図るとともに、晩婚化未婚化を防ぐために婚活にも、といった政策には実りを期待するばかりである。

しかしながら、それだけで十分であろうか。もちろんそうした経済行動の必要性はいうにおよばないが、私は、この問題を大人と社会との関係を将来につなぐ人づくりと捉えることにして、その方向で意識変革(意識改革)をどう展開していくかを考えることにしたい。特に指摘したいことは、こうした取り組みはどちらかというと、大人目線であり、子ど

もの視点が十分に反映されていないとみている。しかも、本来変わらなければならない大人社会の人とのかかわりがますます人間的貧困化に向かっているような気がしている。すなわち、今の社会の人間性等の問題そのものが問われていると捉え、解決に向けて人間関係や人とのかかわりをどうしていくかを今日的に問われていると思っている。

△ ここでは、人間交流の抽象的なものと、所属する集団というカテゴリーにわけて雑感を交え述べることにする。

(1) 人間本来的な事象

支援といった人間的な助け合いの精神が育まれるためには、日常生活における健全な人間関係がどうあるべきなのであろうか。今、人間関係が希薄化しており、加えて密なコミュニケーションを求めるよりも広く浅くのコミュニケーションが定着してきており、そのような状況下では、晩婚化はおろか未婚化が促進され、子育てはおろか子どもそのものにも愛着を示さなくなる傾向が強まるように思えてくる。この問題の根源は人を愛しつくしむという人間らしさを如何に健全に育てていくかということであるとみている。解決としては、コミュニケーションの形態そのものを考え直し、人との交流を考え直し、生命をいつくしむ心が育まれるようにしたいものである。

私は、今生活の便利さや効率優先を掲げる今の世の中において、人間関係までもが効率化であってはならず、ごく普通の営みそのものが肝要と考える。すなわち、人との関わりや社会とのかかわりをごく自然にしたいということであり、そこには手間ひまかけるという精神を育ませたい。最近、街づくり論議が盛んになってきているので、人間作りや人間関係づくりの土壌は肥えてきていると思っている。

ここで、持論をいくつか述べる。

(A) コミュニケーションについて：

・(携帯電話などでつながる) 見えない相手よりも、すぐ(つながる眼に前の) 隣の方から、という視点でコミュニケーション相手や顔を顔の見えるものにしていく。

・互いの人格尊重という視点で、コミュニケーション能力を練り上げていく。例えば、文化を例にとれば、自国の文化を知っていないと相手国の文化を語れないことがよくあるが、それと同じように相手の尊重とは自分をそれに耐えうるだけのものにしておくべき。もちろん、自己中心ではない。

(B) かかわりについて

・丸投げ思考ではなく、どこまでもかかわる、といった姿勢で人とかかわりを強めていく。保育園に預ければ良い、しつけは学校で、など生活の端々に丸投げ思考の方々の多さに気づく。世の中の間人間関係希薄化ではなく親密化が図れるよう、津々浦々から声を上げていく。社会とのかかわりはこうしたところから育みたいものである。

・人とかかわりは人とのダイレクトなものばかりではなく物を介在しても、その姿勢を作っていく。これが物を大切に作る原点である。「もったいない」の背後にはこうした視点がある。

・ひろがり(地域など空間)とのかかわり。土地への愛着、

風土への愛着はまさにこうした考えのものである。

(2) 各種集団における事象

次に具体的方策について述べる。具体的には、家庭環境をどう円滑にするのか。社会とともに取り組むべきである。

(A) 家庭において

家庭の本来のあり方として食事にもっとコミュニケーションを求めて欲しいものである。孤食はもつての他、皆さんで同じものを同じように食べるということを大事にしたい。若い方が家庭料理の温かさなら、コンビニの電子レンジのチンでも暖かいとかいった勘違いがなくなるかと思う。手間ひまかけるということは、かかわり・つながりの原点そのものである。大事にしたい。この他、後で述べるが、会社や地域からの風を家庭に吹き込ませるのも家庭内コミュニケーションとして良い環境づくりとなる。

(B) 企業のかかわり方

企業の社会的貢献ということではなくても、会社子づれ出勤で仕事可能な仕組みづくりということでもなく、家族ぐるみの社員旅行とかいうことでもなく、企業と家庭を結ぶようなコミュニケーションツールを導入してはいかかか考える。ある中小企業では、職場のお父さんの活躍ぶりを社内報にして各家庭に配布し、家族が社内報をみんなで見て話して盛り上がったという。職場の雰囲気や家庭にちょっと伝えるだけでも、企業と家庭がある意味つながっているのである。これもひとつの方法である。

(C) 地域のかかわり方

地域で子どもの面倒を見るとか、地域で育てるとかは大いに進めてほしいが、私は子どもが外遊びするだけでも街・地域をあかるくすると思っている。地域の安全性の問題をクリアにすることを前提として、地域が子どもの姿をみるだけでも地域の各人が子どもとかかわりつながることになると考えている。今は、子供のいることがうるさく迷惑という捉え方もあるだけに、子どもの声がいれば街を照らす明りであり、個々の閉鎖的な雰囲気が開放的になるものといえよう。家庭が明るくホットに、社会もホットに、ということである。

(D) 建築の専門家や育児の専門家とのかかわり方

経済的支援にも安易に走らないように心がけている。例えば、都会で大流行りの駅前保育園などは遊び場もなければ何もない、ただの便利さの追求の結果だからこそそこに何かが必要としてアドバイスが必要である。もちろん、専門家には専門に特化して割合周辺がみえなくなることには注意したい。子育てに関与の専門家も同様である。(そうでないかたもおられるが)

(E) 街づくり

街づくりでは外観のみを揃えようとか、観光とかいう次元でとらえられがちであるが、地域で子供を育てるという観点でいえば街づくりは人づくりそのものである。コミュニケーションの輪を広げ、かかわりを深めていくべきなのである。
△ 以上の事柄はかなり精神的な次元の話や断片的な話となったが、私は意識変革を唱えているので、当然の事柄と思っている。働く親の子育て支援(ひいては少子化対策)とし

ての経済的アプローチとともに意識変革について考えていきたい。

<2>. 子育て支援と少子化~子どもが育つ街 17.3

「子育て支援や少子化・人口減少対策として子どもが育つ街をめざして」

概要;子育て支援や少子化対策には親世代を含めた大人の意識変革によるものが大きいと考え、子供が育つ街づくりとして大人の意識向上について検討すべき。

△ 子育て支援を含め少子化や人口減少の問題について、勤労の不安定さや実質低賃金などに端を発して日常生活の営みに魅力やゆとりが欠如となり、子どもよりも大人の都合を優先させる風潮が蔓延しはじめ今日に至っているといえる。解決に向けては、社会全体の取り組みに加え地域社会(家庭を含む)での日常の営み改善を図ることとしたい。すなわち、子どもが育つ街づくりのために地域社会における親を含めた大人世代の意識改革を図りたいものである。

ここで具体的な話として晩婚化や未婚化をあげる。今、若者にとって結婚が魅力的ではなくなり、子どもと共に将来生活を展望することもおぼつかないといっても過言ではない。確かに若い人たちには「お金がたまってから結婚」「結婚そのものが自由からの拘束」「男には結婚は節目」「女は結婚よりも仕事での生きがい」などの思いがある。どれをとっても、働き方、経済状況、社会通念などに問題がある。これについて対処は社会全体もさることながら大人の意識改革をもって地域や家庭から取り組んでいきたい。

△ 具体的に二点述べる。

・まず人間関係の希薄化について: これは、どんな集団でも男女間においても当然進行しており、お互いの理解にはコミュニケーションが不足している。確かに今は人を介さずとも買い物や時には仕事すら可能になろうとしている。コミュニケーションの充実には何のためのものかを明確にすることからして、そうしたムード作りが必要といえよう。

・次に人間尊重について: 地域や郷土に愛着をというスローガンの活動が各地盛んである。にもかかわらず愛着はいつも観光の次元で留まっており、人を愛して敬うといった次元までなかなか高揚していない。また各地の自然教室でも、自然界で一番好きなものの中に人間が入っていないことが気にかかる。ここは常に人間主体のムードを作るべきかと思う。

△ 以上まとめてみると、問題の解決には環境改善としての意識改革を含めて雰囲気づくりがあり、当事者同士の努力はもちろんのこと地域社会の後押しが必要といえる。そのためには大人は地域の子どもと共に居し、人の慈しみや楽しみといった意識を育むといった日常生活を意識して充実させることしかないと考え。これをもって環境の基礎的雰囲気の醸成としたい。

<3>. 青少年健全育成 17.3

「青少年健全育成は日常生活の充実から」

△ これまで青少年はどのように育っているかを述べ、ある

べき姿を検討したい。

まずいわれているのは、世の中、個性と独創性が無いこと。これを受けて、創造性教育や個性を伸ばすための学習が必要などといわれている。

これを聞いて常に思うのは、社会が個性や創造性を受け入れているのであろうか。社会が若者の芽を摘み取り、個性や創造性が云々といっているだけに過ぎない。その証拠に、社会で個性を發揮するとたちどころに和を乱すというし、創造性を發揮するとたちどころに現実味が無いとか市民ニーズにそぐわないとして却下されたりしている。

要は、社会の都合のいいような個性と創造性はウエルカムなだけである。こうした社会環境が日常生活はおろか教育にも影を落とし、のびのびした生活が送れないばかりか管理教育の徹底を招き、若者が心身ともにひ弱になって、若者批判だけが大手を振っているのである。こうした状況で、青少年の育成をいうならば、まずは社会の若者への見方を変えること、次に健全な教育の実践ということになる。

△ では、具体的にはどう考えるのか、教育と日常生活の二面で論ずることにしたい。

私は、まずは個性の確立がすべてに先行すると考えている。というのも、創造性や感性などは個人の素養があつてのものであるからである。これが社会性とリンクして始めて自と他、個人と社会、といった枠組みで個が確立した総体と捉えられるのである。そうした個性像を描けば、必然的に備わる要件も決まってくる。すなわち、観察力、コミュニケーション力、思考力として批判精神や分析及び総合の力、といったものが兼ね備わるべきと考える。

また、日常生活のカテゴリーの扱いについては、人が具備する各種の能力は生活を通して沈着するものと考えている。各種能力は机上勉強ではなく、実践を必要とし、しかもそれは社会の中で育っていくものであるだけに、地域貢献や社会貢献へと姿を変え発展することにもなる。

△ 結びとして、健全育成は健全な日常生活の営みにありといたい。そこには、人がおり、自然があり、社会がある。そんな環境が人の生育を心身ともに促し、また人はそのための環境を充実させていくのである。こうした観点そのものが健全教育の健全姿勢そのものである。まずここから着手すべきかと思う。

<4>. 生涯学習 22. 11

「社会意識形成の視点からの生涯学習について～生涯学習振興に関する提言」

生涯学習は学習成果の社会への還元を含めた自分のための学習(自分磨き)として位置付けられ、その制度は社会の成熟に向けて大きく貢献している。私はそうした生涯学習についてより充実感の向上を図る一視点として学習の社会的意義の向上を目指したい。

なぜか。(独学と対比させて)学習に社会性が兼ね備われれば、自分自身の学習の総体的位置関係(自分の目指す学習の方向)が分かり、学習の面白さ(一人世界超えの実感による活力)

がより増幅され頑張れると考えられるからである。これに加えて私は、学習成果の社会還元もさることながら社会をもっと個人ベースで積極的につくり上げていくという使命感が醸し出されるようにしたい。こう言う学習にはやはり立派な専門や教養が必要と思われるが、そうではなく生涯学習のノリによる自然体の参加でもって(市民には)使命感が湧き、社会への関わりが実感できると考える。

こうして、学習成果が社会との結びつきを強めれば、良識や見識といった社会意識が市民生活を支える社会素養となって市民にフィードバックされ、市民の思いが自ら実感されることになる。もちろん各界の専門家の尽力による社会意識の醸成とともに市民感覚を取り入れた社会意識により、市民はより自覚的となろう。これをもって学習システムそのものに社会認識が盛り込まれたといえる。

具体的には、専門家の論理的なアプローチのところに市民感覚からの情熱的感性的アプローチによる学習成果が(レベル不問で)多様に混在することにより社会的意味が生起し、生涯学習を介して地域コミュニティの充実や市民活力の向上へと効果が發揮されていくことになる。

では、生涯学習施策へはどう反映か。生涯学習を介した市民による社会づくりの方向性の下で市民や社会の多様性への対応の一つとして、国際域や県域はいうに及ばず市町村内の小域(任意の小勉強会他)までも視野に入れることはまわりまわってコミュニティづくりにも繋がり、また市民活力醸成の視点を活かすことにもなる。こうした視点での生涯学習に大いに期待したい。

■4. 生活環境

生活環境とは市民が暮らしを営む諸々の環境の総体である。市民が消費行動における問題は消費者問題として、市民が安心して暮らせる社会対応として福祉問題を、ここで設定する。

<1>. 消費者問題～食の安全 16. 12

「消費者問題のうち農食品に関して環境整備支援の視点で捉える」

消費者を守るために、食に関しては遺伝子組み換えや外国産作物の安全性などの問題、また種々の製品に関しては不良品や危険品の問題、さらに偽装や悪徳商法の問題などが多岐にわたっており、それぞれに取り組みがなされている。そこで私の役割として、あまり扱われていないところで消費者問題を生活の視点からもっと枠を広げて考えてみたい。ここでは、食の安心安全について環境問題の次元までもちあげ消費者問題を振り返るというアプローチを模索したい。以下に述べる。

(1) まずは、農作物の在り方について。農業生産者の役割はもちろん安心安全の農業であることはいままでもないが、それを実現させるには健全な自然環境があつてのものであり、農業はその環境保全に大きな使命を有している。これは平地でも山野でも同じことであり、例えば中山間であれば農業は山を守っていることになる。こうしてみると環境で安心

安全な農作物生産の構図は、河川に例えて水下という消費者から水上という生産者を支援することで、全体の環境が農作物を介して保全されることになる。この観点をぜひとも消費者問題に兼ね備えたいものである。

(2) では具体的にどうするのか。農業の方々とコミュニケーションの場が商業者も含めてあって欲しい。さすれば、生産者・商業者・消費者の三者には購買を介して顔が見えることになり、信頼も生まれてこよう。それに、消費者の価値観が農業への理解として変わっていく。例えば、農作物について見栄えがいいとか食す際に手が汚れなければいいとかいった割合ご都合主義的な価値観が意味ある価値観にかわっていくと思う。ちなみに、泥付き野菜の泥は食には土壌があり農夫がいることを知らせるメッセージとも取れるようになる。

まとめると、環境次元からの思考では、食文化について「食す行為」から遡って「つくる行為」までを消費者側でコミットする事になり、安心安全を含めて文化創生までもが使命となって、ヒューマンとしての充実さが何事にもかえがたく得られるといえよう。こうした視点で富山から発信し、実践が進むよう英知が機能して欲しいと願っている

<2>. 消費者問題～市民視点で 23. 02

「消費者問題の背景を市民視点で俯瞰する」

消費者問題について基本的姿勢に少し気になることがある。それは、消費が前提であること、消費者問題が社会構造に起因したいわば社会矛盾の現れという捉え方をしていないこと、問題解決には倫理や道徳の先行に比して社会構造論的対応が不十分であること、である。これらのことがあってか、個々の問題において解決に成果があがっている割には社会システムの改善機運があまり高まってはいない。

ここでは消費者問題を俯瞰の形で捉え、根源には社会システムづくりがあると以下に論考する。

消費者問題においては、消費そのものへの着目は問題の本質を狭くさせ受け身的な姿勢をつくるだけに、何よりも消費者保護の枠を超えて生活者の生活防衛という能動的姿勢の形成が必要であり、社会における市民レベルでの改善運動の推進が肝要となる。さすれば、生活者の主体行動として社会への市民参画が定着し、施策立案に対しても生活者の参加(市民参加)が当たり前となる。

次に、生活次元から社会への理念づくりを考える。生活問題の解決に向けた社会理念については、事(問題)が起こってからの対応というレベルを超え、事が起こり難い社会環境づくり・維持する姿勢づくりであり、これより社会における見識や良識といった社会意識を人権擁護の砦として生活者が作り上げることができよう。

関連して、最近の消費者問題の基盤固めに「倫理や環境に配慮した」消費行動の概念が脚光を浴びているが、今必要なのは「考慮」ではなく「(倫理や環境づくりに)参加」という社会システムづくりや政治の次元までのコミットであると考ええる。

なお、倫理を基軸にする考えについて一言。明らかに誤った施策や技術欠陥についての是正は倫理問題として対応可能であるが、問題はグレー状態である。具体的にはグレー範囲の企業活動については、社会ではあたかも容認されているかのようにもとられがちであるだけに、社会づくりが必要となる。例えば、農薬漬け農業、原発事故の無責任体制、公害などが挙がる。

以上、生活防衛の姿勢の明確化により積極姿勢が醸成され、社会への市民参加が実現し、倫理や環境が作られるようにしたい。

<3>. 福祉問題～高齢者とともに 12. 04

「高齢者福祉に関する建築的な視点からの一考」

執筆理由： 自分が高齢者の部類に入ってようやく高齢者問題が切実に実感できるようになり、福祉にはことのほか興味が湧いてきました。いままで、高齢者や福祉の問題を教育や建築の分野からアプローチしてきたので、ここに高齢者福祉問題そのものに少しでもアプローチできればと考えて自分なりにレポートしてみました。

▲ 今の世の中では、過度の経済優先のために人間疎外が根本的に横たわっており、そのしわ寄せが弱者に顕著にあらわれている。特に高齢者については、高齢者の体力能力のレベルとは関係なしに社会全体の「つけ」をおわされているかのようにみえる。もちろん、高齢者に対しての社会の取り組みとしては、介護をふくめ福祉の観点からの政策に基づいて、老人施設の建設や介護システムの整備など大変進んでいる。とはいえ、社会全体で高齢者に対してのメンタルな取り組みが弱いように見え、若いへの尊敬の念がないようにも見える。また、これが高齢者からは感受性を低下させるとともに生きる力を減退させているようにも見える。このようなご時世だからこそ、抜本的な政策が必要と考える。

私は、ハードの面やソフトン面での取り組みに足してメンタルな面での取り組みとして老いを楽しむことが政策化できないかと考えている。これは何も老人だけの問題ではなく、若い方をも含めたいわゆる社会全体で人間の人間らしさを育てていくという当然のことを培っていくものである。まずは高齢者を核にして考えていきたいと思いますということであり、結局のところ世の中の意識改革につながるものと思っている。福祉関係に携わる方やそれを物理的に支援する(建築等)、それにこうしたことを支えていく市民の方々に対して、今一度の意識向上が図られるべきとする。実際これには日常の教育であろうと考えているので、学校教育のみならず、地域教育・家庭教育が出番といえる。

▲ 私はこの種の取り組みを三段階に分けてみた。

(1) 第一は、建築関係者への取り組みである。たまたま私はかつて学生に高齢者問題を建築サイドからどのように改善を目指していくかを考えさせていた。老若男女混合ということで、幼稚園や保育園と老人園を一緒にするとか、近接にするとか、はたまた家庭では二世帯住宅とかいうよりも、リビングルームからして交流の仕掛けを作るのがよいとしている。

(2) 第二は、(介護福祉関係は専門の方にお任せして) 市民に

向けて取り組みである。私はこれについて、混じりあいの実践と本能的行動の醸成の二点を提案したい。

・第一点は、今行われている若さも老いも同一に生活を営むことのできる街づくりから始めたい。若者だけとか老人だけの街では交流による多様性が育まれない。街そのものに小さな単位で二世帯化を図り、常に若者と老人の姿が見れるようにしたいものである。こうすれば、特別にこども施設と老人施設をあえて接合することが必要なくなる。

・第二点は、本能的行動の促進である。もともと、人間は学び遊び労働する動物である。人間は、効率最優先の合理主義にのっかって大人になると本能的行動を束縛している。人をいつくしむといったものは本来本能なのである。これを呼び戻すには遊びやコミュニケーションが必要といえる。遊びは年齢を超えていい雰囲気を作り出すので大いにこの方向で取り組んでいくべきと思う。もちろん、これは、ITゲームということではなく体を動かすことを基本としていることはいかに及ばない。

▲ 以上のように考えて、高齢者問題を高齢者自身にのみ押し付けるのではなく、社会全体に、交流と本能的体動かしを政策化していくべきと思う。これをもって、老いを楽しむ世論形成が可能となっていくであろう。なお、学校教育については、特別に高齢者の成功話を聞くというような教育ではなく、教材に高齢者も登場するものにしていきたいものである。できることはたくさんあると思っている。

<4>. 福祉問題～日常の意識 12.07

「福祉政策を実効あるものにするためには日常における意識改善から」

▲ 福祉に関する方策については、今までは老人、子ども、障害者など縦割りの視点であったものが、最近、人・環境・システムといった横断的かつ総合的な視点となったことは大いに評価している。とりわけ、人を支える助け合い、住みよい街づくり、気楽に利用できるシステム、といったよう横断的な展開により、多くの成果が生みだされるものと期待値が大である。

しかしながら、今の社会では希薄な人間関係、効率優先と経済至上主義が支配的であるために、そうした政策の実行には社会に対して別角度からの方策が必要となっているのではなかろうか。すなわち、せつかくの良い政策を実施するための下地となる生活次元において、もっと光をあてて人の意識改革として世の中全体のボトムアップ的な人間社会の醸成を今ここに福祉問題として（あるいは大きな意味での環境問題として）取り組むべきと考える。

私は、人間関係の希薄さが便利さとあいまってこの世の中の处世術となっていることを何とか払拭したいと考えている。もちろん、社会を根幹から世直ししたいという気持ちはあるが、今ここではそれをいうのではなく、自分たちの卑近なところでは世の中の大きな流れにのらなくても（効率優先など考える前に）気持ちのこもった行動が結構できると思っている。すなわち、ちょっとしたことを、その場でそのつど

考え行動して気楽にちょっと頑張っていけば良いということである。この観点で以下の議論につなげたい。

▲ まず人間関係については、単にコミュニケーションを円滑にといったことではなく、人が社会の中で人間らしく振舞うことの出来るただ住まいをつくっていくべきと思っている。そこには、当然、老若男女、何のわだかまりもなく関わられるとしている。

今の世相には、「不利物=時代遅れや汚い」といった一方的な価値観がある。また、大多数の効率よい営みとは異なったものについては、じゃまもの扱いが定着している。場合によっては、迷惑物とか異質物といったように。この状況が改善されなければ、福祉政策も単に理想的方策の域を脱しきれないのではなかろうか。

そうしたことは、理屈で分かっているが実際にはしっくりこない、といったことがよくあるが、まさに社会全体の効率優先、経済優先から端を発するものの道理を変えていかねばならないのではないかと。すなわち、社会全体における意識改革として、今のシステム社会では「大多数と同じ行動をして余分なことを考えてはならない」といった風潮に対して、異質をも尊重できる雰囲気づくり、老いへの尊重をも考えていかねばならない。

（これは何も福祉だけの問題ではない。形をかえれば文化財保護の問題の根底を問うものでもあり、男女参画の問題を問うものでもある。福祉の分野からも、こうした問題を念頭において、各問題に対処するオピニオンリーダーとともに、着実に行動していきたいものである。）

そして、（先に述べたことの繰り返しになるが）我らのとるべき行動としては、日常生活で上記の問題について（既成概念にとらわれることなく）そのつど考え対応していきたいものである。こうした小さな取り組みが、全国津々浦々から集積されて大きな力に変わっていくものと思っている。

▲ では具体的にどうするのか。私は、日常生活で以下のことに留意していけば良いと考えている。

(1) コミュニケーションの場を増やす。

その場にいることだけで交流しているという雰囲気を実感すること。いるだけで培うものであり、子どもと一緒に、老人と一緒に、いることの大事さを主張したい。

(2) 積極的なかわりやつながりをもとめていく。

社会として老に対しての役割をどう求め作っていくのか、上記項目があつて初めて可能となっていく。かわりのチャンスが増えるというものである。

(3) 世論を形成していきたい。

上述観点で津々浦々何でも取り組み、どの取り組みにもかかわりという視点を持っていたいものである。

(4) 具体的な視点と行動として生命の尊さを実感していく。

生と老いをどう理解していくのかといった問題に対して、社会全体で種々取り組みがあるが、私はいまひとつの取り組みとして、物を大切にすることにしたい。物とは物にあらず、そこには人が介在している。すなわち、物を通して人と人がつながっている。この視点をもって人とのつながりを広範囲

に認識していくべし。それによって、畏敬の念、尊敬の念が自然と育まれていくものといえる。老と若と一緒に住んでいない現実には、こうした視点は欠かせないと思う。

▲ 以上をもって、日常生活の営みから声を発して社会の根幹を響かせて福祉の政策が円滑に成果を生むことを期待している。なお、コミュニケーションの場の拡張として、児童相談所や街中カフェ、幼老一体施設などの増設といった政策は当然実施すべきであるが、私の主張はあくまでもその前の段階で皆さん意識を少し変えましょうということにある。

<5>. 福祉問題～幸せの実現に向け 16.10

「幸せ社会の実現に向けて、日ごろの営みから」

▲ この世の中、満ち足りた豊かさの中にも格差拡大とか、弱者へのしわよせ、とかいった社会問題があり、また人間的な問題としては、人間関係の希薄化とか、効率重視による人間性の軽視とかいったことがある。しかも、後者については昔では考えられなかったことが今当たり前のようになってきている。そんな世の中では、ハードやソフトからの施策に加えてヒューマンウェアとしての施策が福祉の施策と思っている。

そんな観点で世相を展望すると、弱者の存在が大変気になっている。例えば高齢者は家族にも地域にも自分を殺してまでも遠慮といった偏ったかかわりが見られる。また普通の方々（健常者、若者・中堅など）はどんな意識かといえば、弱者と呼ばれる方々と分け隔てなく交流や関連が建前上あるとされているが、実際日常的には無いに近い。そんな状況下では市民には、弱者施設ひとつとっても自分らとは関係ない別の世界といった捉え方がどうしても出てくる。皆さんには、ふれあいとか思いやりとかがあれば何でもなるといった考えがあっても、実働へはつながりにくいといった意識が見え隠れすることも確かにある。

▲ こう考えると、我ら市民のやるべき行動が見えてくる。市民にとっては、福祉の専門家の方々の応援や協力はもちろんのこと、社会の構成員として市民だからできることがある。後者について以下に列挙したい。

(1) 当たり前のことを当たり前にまず挨拶。子どもには挨拶を奨励している割には大人同士では特に地域では挨拶は今一である。地域では街中を車でなく歩きにして地域民との対面が必要かと。買い物でも何でも。さすれば、街が屋根のない大きな社会施設ということになると思う。

(2) 気遣いの前に健康行動を。体をまめに動かし、健康年齢を伸ばすことが肝要である。これには笑いと寄り添いが一番であり、世の中のギスギス感が和んでいくものと考ええる。

▲ そんな意識を各自が持って街に粹に住みたいものであり、日常生活を健全にしたいものである。さすれば、人間関係を人間味あるものに、やさしさ、いつくしみ、などの感覚が自然と生まれると思う。今一度いうと、人と人の距離が短く顔のみえる街、笑い声がこだまする街、人の息遣いを感じる待ち、そんな街を意識して住まおうというものである。こうした市民行動がきっかけに、学校でもそんな観点からの協

働があり、行政への施策へと展開していくものと考える

<6>. 福祉問題～社会システムづくりの前段階 22.08

「安心・幸せな暮らしの延長による社会福祉時代の地域社会づくり」

▲ 県の福祉基本計画は、新時代の福祉政策施策として福祉を広く捉え、いわゆる人づくりからシステムづくりまで、環境整備や実践等を加えて構成されており、特に市民との協働ならびに安心・幸せ感に包まれる社会に向けての地域づくり構想も魅力的で大いに期待される。

そこで思うことがある。確かにすべての人の安心・幸せ感を供与できるという地域社会づくりに向けて、各種施策に関する市民の関わりや実働への道が開かれているが、（これが市民協働といわれるものの）いまひとつ市民の底力が発揮されるようにと考える。すなわち、市民と行政の役割分担という分化分業はこの世の当然のこととはいえ、何とか市民の社会への関わりに充実感が持てるようにすると考えるのである。人に着目していえば、触れ合いや支え合いといった本来の人間行為が、（基本）生活圏における暮らしにおいてしっかりと培われるようにすることである。また、地域づくりについても、そうした暮らしの健全化が集積されたものともいえ、その意味では暮らしの延長に地域づくりがあるといえる。こうして、暮らしという学びや教えや育みや活力醸成等の蓄積により、市民の意識がつくれ、市民の活力が市民参画として磨き上げられていく。これらを大事にしたいものである。

▲ ここでは市民参画のあり方、社会意識の形成、地域づくりの構想を以下に述べる。

(1) 市民参画。市民参画とは施策企画段階からの参画をいう。その本質は、市民と行政が共に勉強することをいう。もちろん、企画段階では学術やコンサルからの支援もあるので、その意味では官学産民の連携となることもあろう。全国では、神奈川県大和市や東京都の国立市がそうした連携で大きな成果を収めていた。しかし、こうした取り組みは全国に広まらなかった。理由は、行政は行政でという考えのもと市民参画の本意に理解が得られなかったからであろう。だからこそ、民と官の両方にわたかまりない協調姿勢が今後は必要といえる。なお、市民参画では、市民参画の場が行政によってあらかじめ作られるのではなく、市民が市民参画の場をつくっていくことが求められている。

(2) 社会意識。もともと社会意識とは、世論とか社会常識とかいったことを指すが、ここでは社会における見識良識の事とする。もちろん社会意識は個人各位の社会に関する意識として見識良識が磨き上げられ、これらが集積して社会における識となる。「森と木の例」になぞらえれば、木の段階での（個々）意識が森という大きな段階での意識になり、かつ森の意識が（各々の）木の意識を成長させていく、ということになる。社会と個人との関係をこのように意識や参加として捉えて初めて、個人及び社会が健全化していくことになる。社会福祉はそうした意識がバックにあつてこそ輝くと思っている。なお、社会意識はどこで育まれるかといえ、それは暮

らしの中からであることを付記しておく。

(3) 地域づくり。地域づくりや街づくりの根幹は、いくつもの(基本)生活圏ごとにごく自然に営まれる暮らしが、街づくりの集積として社会を形成するといったことを背景にしている。街においては、人が往来し、話声で街が包まれるのであり、顔の見える街が地域の健全化、ひいては社会の健全化へと発展していくと考え、また暮らしを営むことは基本的人権そのものであるとも捉える。これにより、危険・不安、環境改悪、格差拡大等は人権問題そのものとして改善を図りたい。

△ 本稿では、成熟社会に向けた社会システムづくりを論じる前段階として、市民の素養を活かす取り組みが必要であると主張した。この観点での社会システムづくりならば社会システム運用も「すべての人のため」として円滑となろう。これをもって、富山における富山人による土着な福祉社会(富山型共生社会)づくりに資すればと思うしたいである。

■5. 環境と街

人間が暮らしを起点に周辺の諸々を環境として捉え、これには自然環境や社会環境、住み営む視点では街や都市があり、自然と人間との共生としての農空間、水環境や雪環境などがある。こうして設定した環境を暮らしの視点、市民の視点であるべき姿について考えていくことにする。

<1>. 環境の保全と創造～市民と共に 12.07

「豊かで快適な環境の保全と創造について——市民側からの協働を目指して」

△ 環境問題について、種々の環境ごとに問題に対処するのは当然であるが、ここで少し観点を变えて、環境ごとの対応といったいわば縦割のようなものではなく、個々の環境問題全体を市民側の立場からの総合的な対応として考えたい。理由については、もともと環境問題は人間の物質的・精神的な営みの向上をいうものであり、そこには安心・安全はいうにおよばず安らぎ・ゆとりや人間性の向上など、人間が心身ともに健康で人間らしく活動する周辺整備にかかわるものだからである。このように考えると、環境保全と創造という環境問題の解決(環境の創造的構成)に向けた種々方策について、技術対応に加えてメンタルな面での対応が市民サイドから湧き出てくるように思える。

例えば、山林の問題では、治山治水や林業生産ということでは山を守ることの大事さはわかっている、山林をおろそかにするとツケが人間に跳ね返ってくるものといっても、実際に下流側の人間たちの受け止め方が今一つ不十分のために、環境の創造どころか保全も怪しくなっている。もちろん、環境保全当事者側が当然そこまで考えていることは重々承知の上であるが、言いたいのは、良い環境があつて当たり前の中での、良い環境づくりそのものに理解と協力が得られ難いということである。

こうしたことは、生活環境として、文化財保護の問題でも然り、街づくり運動でも然りである。くどいようだが、やっている方々はそこを含まれて実践されているが、ときおり「わかっちゃいないな市民は」と愚痴るのもそのため

ある。

△ ではどうするのか。まずは、環境問題が市民のものということが実感できるようにすること、と思う。それには、いくつか段階を踏んでいくべきかと思う。

・第一には、市民本位の生活の面から、自然環境や生活環境をリンクさせていくような世論作りが必要である。そのためには、まずは、各自の生活圏において少し枠を広げ、広げた部分があたかもお互いの糊しろのように繋がる触手であるようにしたいものである。

・第二には、そのようにして、各自の視点から環境を自然や社会や生活といったところから繋ぎ合わせていくのである。環境を熟知するのではなく、環境と関わることを実感するという最も大事な行為をいうのである。そこから順に枠を広げていきたいものである。

・第三に、環境とのかかわりの中で、環境を支えるという行為や環境からの恩恵を受けるという行為についてしっかりと実感することにより、これがいつしか愛着とかいった感情へと変わっていく。

・第四には、かくして市民側のスタンバイが完了し、専門家とともに環境問題の解決(環境の創造的構成)へと協働することができる。そこでは市民感覚のニーズが先行し、専門家はそれを形にするといったことになる。

△ 以上のアプローチは、特定の環境問題を指すものではなく、いってみれば市民側のアンテナの整備を真っ先という意味であり、特別な市民教育を謳うものでなくごく普通の日常生活においてセンスを養うようコミュニティを構成しながら、総合的にトータリティとバランスで種々問題をケースバイケースで対応していくことをいうのである。こうしたアプローチがあれば、環境の保全と創造についてより力強く充実して進むものと思っている。

<2>. 環境の保全と創造～地域にて 16.11

「豊かで快適な環境の保全と創造について～富山らしい地域主体の環境づくりを」

本稿では、環境づくりについて、より充実した人間生活には環境が如何にあるべきか、それとともに人間側が何をもって環境に働きかけていくべきか、について述べる。

まずは視点について次のようにしたい。第一は、環境について「環境は人を育て、人は環境をつくる」といわれているように環境は人間と一体のものであると捉える。第二には、例えば森林保全の問題なら森林環境だけといったように問題に合わせて環境を設置するのではなく、森林環境に加えて森林社会環境などのように、環境を広く捉える。

次に、環境づくりのアプローチについて。地域をイメージ的に環境と融合させる。最近流行の里山経済圏の設定や地域単位のローカル経済圏の設定をいう。私は、もっと考えを進めて、人間と地域の一体化として、自然、社会、人間、考え、意識、歴史などを有機的につなげたい。

そんな方向性のもとで富山においては、富山という大自然の環境、ホットな県民性の意識環境、富山らしい産業の生産

環境などについてアプローチするのは当然であるが、これらに加えて環境の総合化を地域には家庭を入れたい。そしてそこに、学校教育、地域教育、家庭教育という教育を入れたい。

私は、身近に人を支えている環境に大いに着目した教育の必要性を考え、具体的には自然の愛好と感性の向上、富山県民どうしのごくありふれた挨拶、富山の歴史風土環境を受け継ぐ風土の愛好、などに着目したい。

こうした取り組みで、しだいに街の美化や人間関係の密実へとつながり、それこそ豊かで快適な生活を満喫できるものと思っている。すなわち、種々環境から受ける当たり前のことを当たり前のように受け止め、当たり前の行為をもって、街から笑い声が聞こえる環境、そんな環境づくりを目指したいものである

<3>. 水環境 22.10

「親水による地域づくりにむけて」

△ 地域づくりにおいて、山間部水源から河川を経て平野部における生活営みへの恵みまでを(大気循環系含め)自然界水環境と捉え、人間社会はその水環境によって支えられる、といったことを大前提の考えとする。しかし、人間の便利さ指向が水環境との接する機会が以前よりも希薄にさせられがちであり、水災害や渇水のマイナス面が嫌われていることもあって、水環境にはあまり関心が高まらず、水環境あつて当たりの認識が気になる。改善となると、水環境の恩恵について啓発の教育に加えて生活実体験としての学びの必要性を痛切に感ずる次第である。

ここでは生活実体験に着目し、もっと積極的に自然体験を進める上で山や川や野原や森林という自然との関わりを増やし、自然圏の動きとして風や水を取り入れた自然とのふれあいが必要と考える。これこそが自然界と人間社会の一体化であり、地域づくりはその一環となって、我らの暮らしが親水でもって潤おうことになると考える。

△ 本稿では、平野部の水環境に限定して地域を潤わせる親水の構想について述べる。

(1) 町を流れる水路

町では暗渠が多いために、流水の風景を見ることや流水の鼓動を聞くことの機会が少ない。町中を土づくりの小さな水の路を(部分的でも)通して、流水なる水環境で町が潤えばと思う。

(2) 水公園

水公園は、(噴水はあってもいいが)池があり、流れ込む水の路が自然空間を造り、周辺に潤を与える。こうした水公園があれば、最近流行りのピオトープを狭い範囲内で設置することなく、地域全体が自然体のピオトープがあるといわれるようにできよう。

(3) 町中や水田での並木や列木

水田風景には何とんでも水の路と(並木道は無理にしても)一部にでも列木道が周辺を和ませる。また町中においても単に街路樹ではなく、水の路とともに列木道があるべきかと思う。

△ 以上、生活の充実として生活空間に親和する水環境を取り込むべきと述べた。県全域において、主街道や脇街道に加えて山と平野を結ぶ大小河川並びに水田や町域における水の路により、県民生活がより和むことを富山に望みたい。

<4>. 雪問題 12.08

「富山人の気質と雪～現代技術社会だからこそ雪とともに楽しみたい富山の情緒」

概要：雪と生活という観点で、雪が果たしてきた役割をふまえて克雪、利雪、親雪について文化的な素養でのぞむこともありうることを主張した。

△ 我らの生活空間においては雪の存在が何となく軽くなってきており、雪が生活空間に支障をきたす面が強調されるあまり、雪が富山に果たしてきた情緒的な役割がみえにくくなってきてはいないだろうか。と同時にこれまで雪を何となく有機質として扱っていた富山らしさがなくなりほしないかと危惧している。昨今、現代技術社会の反省として文明的な対応ではなく文化的な対応で人間性を回復していくことが叫ばれているなら、ここに富山の問題として雪をどうわれらの意識において捉え直すかが望まれる問題と思っている。すなわち、富山の富山らしさを今後ピーアールしたい場合も含めて、雪対策推進にはぜひこの観点からの円熟味ある考えを磨きたいものである。

△ ではまず、なぜ我らの生活に雪の無機質な面ばかり強調されるのであろうか、から考えてみたい。それは、雪のある生活を今日の文明の理屈で捉えているだけであり、言うならば都会仕込の生活モードが席卷して、雪を何となく無機質なものとして現代的に対応していることによるものと考えられる。

確かに、克雪、利雪、親雪においては雪が有機質なんて思う必要もない。生活空間のよりよい充実を目指していけば、除雪や融雪など克雪機械力の向上とともに、克雪が効率よく実施されていくことになる。また、生業としての雪の利用活用を目指し、スキーなどのウインタースポーツや雪のイベントとして雪を観光資源として活用も以前にも増して盛んに取り組みされている。このように、雪とはあたかも一線を画した生活が技術の進歩によって自然と當まれるようになってきたといえる。

しかし、私は、北陸の風土が雪により形成されたことをもっと重く受け止めて、現代技術文明社会だからこそ、雪と生活を、見直していきたいと考えている。すなわち、これまで雪が県民にとって何であったのか。雪というよりも富山の自然として捉えたとき、雪は我らの身じかに接近していて多くの県民性の意識を形成してきた。

第一には、県民の勤勉性があり、これは雪とは無縁ではない。雪どかし、雪おろし、といったことが地域のコミュニティとともに勤勉性と協調性を形成してきたのである。

また第二には、冬の風土を冬の静けさとともにただ住みながら楽しむということがある。冬があればこそ、春を待ち望み、秋の収穫を冬に対して備えているといったように。それはもう富山らしい風流の楽しみ方といってもよいであろう。

最近、高度文明社会になればなるほど、自然と親しむといったことが忘れられがちであり、雪の存在も今日的に変わろうとしているからこそ、克雪、利雪とともに、北陸の風土の原点として、雪をも含めた生活環境を大いに楽しんで営みたいものである。さすれば、今の現代技術社会だからこそ精神的ゆとりが克雪、利雪、親雪に対して今以上に情緒的になるのではなかろうか。雪どかしなども機械力をそうした観点で役立てていこうというものである。

△ 私は、これを雪の文化性のもとでの文明的転回の一つとと思っている。全国津々浦々、こうしたことを積み上げて、日本の文化と文明の結合として、富山から雪をテーマに狼煙をあげたいものである。

<5>. 農環境について 11.8

「農業の根幹にコミュニティの理解要」

概要；「農業は生活の営みを支える基盤として大いに市民生活に貢献すべきものである」と考えて、今日的「農業」に関する問題について、文化や教育の視点から議論に加わりたい。と以前から思っていた。ここにこの種の問題を考えることにした。

△ 農業をとりまく状況は、近年のグローバル化に伴って一段と厳しさを増している。「農業を犠牲にして工業を優先する」とか、「農作物は安い外国産を食せばいい」とか、「農業も近代的センスを身につけ商業として再生を」など、農業の根幹が日に日に揺るがされてきている。あたかも、農業は時代遅れといわんばかりの風潮が作られ定着しつつあるのも現実である。

一方、そうした動きに対して、「治山治水として林業・農業を育てよう」とか、「風景や文化は農業にあり」などの声が急速に大きくなっている。これは、安易な経済至上主義で人間生活の空間が損なわれてはいけない、とする論調のものである。最近では、国民全員に啓発する意味で、「都会と田舎の連携」が叫ばれるようになった。これは、都会の方にもっと農業を知っていただくためにとにかく田舎に着て農業体験をしようというものであり、グリーンツーリズムもそのひとつである。

私は、「農業の抜本的活性化は市民が身をもって理解を深めるところにあり」と考え、「都会と田舎の連携を地道に実らせよう」と思っている。それだけに、そうした連携をもっと促進する意味で、田舎から都会へのアプローチを提唱したい。確かに都会の方が田舎に来て種々体験して気も心も自然体になって帰っていくのはいいが、それで終わるといことは如何にももったいない。そこに何らかなるケアがあればと思う。またもうひとつ。田舎から都会に出かけ、田舎のいいものを都会に植えつけることである。都会にビオトープを持ち込むもあり、小さな菜園を持ちこむのもありだが、もっと何かを持ち込みたいものである。

△ 私は、田舎人の気質に着目したい。とにかく、閉塞感漂うこのご時勢では、生命が軽んじられざみであり、自然の恵みが軽んじられているように思えてならない。このようなところから、人間の絆もなかなか育まれようがないではないか。最近、まちづくりとしてコミュニティを大事にするようには

なって来てはいるが、肝心の家庭のコミュニティが育っていないとはなかなか思えない。家庭には食生活が日常習慣化されて健全なものになっているのか、大いに疑わしいだけに、そうしたところに田舎人の気質が伝播し、ひいては農業の根幹が大いに理解され実践されるものと思っている。

目の前で植物が育ち、恵みを授かることこそ、人間の営みの根源である。こうしたところから、文化が生まれ、風景もまた文化の素養を兼ね備えていくのである。そして、地域全体が人づくりの場と醸成していく。

△ このような視点で農業を大いに議論し、農業を農業従事者で無い我らが積極的に見守っていくことこそ急務と考える。これを皮切りに、農業のかかえる諸問題に対して解決策を見出したいものである。

■6. 文化、学術

市民の暮らしを核個たるものにするのは文化性や学術性なのではと考える。すなわち、歴史を含め文化が時空間的に我らの生活を地域に根差してふへんかしており、またその理屈付けに学術のセオリーが支持していると考ええる。

以下に、文化や学術そのものについて、またそれらと市民と直に結び付ける施設設備について論議する。

<1>. 文化～文化財保存と活用 12.07

「富山県の文化財の保存と活用」

△ 一般に、いわゆる文化財については保存・活用を街づくりの一環としてとらえ、観光資源として活用している。しかしながら、現状をみると、メジャーなところはうまくいっているが、マイナーやこれからといったところでは厳しいものがある。

なぜであろうか。理由は、文化財活用が地域の風土とミスマッチぎみなことが多く、地域住民の支持が得られていないように見えるところにある。これがひどい場合には、過度の観光化により文化財の本質が損なわれるきらいもある。

改善としては、最終的には観光化をめざすにしても、地域での醸成がないまま直ぐに観光化に走らないことを心がけることが一番と思う。これは、住民にとっと、文化財とともに住まうことの意味を問い直すものでもある。

△ 私は、ここで日常生活における文化と文化財という観点で「なぜ残すか」、「どう残していくか」、「どう文化世論を作っていくか」について問題提起し解決に向けて論じたい。

(1) 第一の問題については、文化財とは我々にとっていったい何なのか、またそれによって生活の営みの中でどう位置づけていくべきか、考えることである。

文化財は過去からの生活の営みに関して結晶化されたものの総称と捉えると、文化は現代のみを対象としているのではなく、過去から続いている時空そのものである。文化財はあって当たり前であり、文化財が過去から現代への歴史的存在を肌で感ずるものであり、人のかかわりによって愛着となっていく。

そうしたところにおいて、我らと訪れる方々とのコミュニケーションが観光と呼ばれているものとなる。このように考

えれば、我らの生活を皆さん（訪れた方々）に伝え、皆さんが癒しや感動などを享受することである。また皆さんには文化財に根付いた生活を皆さん自身の地域で営んでいくことなのである。こうした地道な取り組みが、次を創生すると思っている。

(2) 第二の問題については、上述のコミュニケーションを可能にする技術、特に修復技術について論じたい。

文化財を残す側には大いに問題がある。それは、職人の文化意識の低さである。例えば、掛け軸でも関係の職人は今日の技術で補修してしまう。古い建造物の改修でも、職人は無知により（まだまだ健全な）古い材を新しい材に平気で取り換えてしまう。

また、経済的側面と絡んで安上がり修復もまた問題となっている。すなわち、下手な修理（安上がり修復）は返って逆効果といている。例えば、78年宮城県沖地震で文化財の蔵を安上がり修復したために、11年の東日本大震災で大きなダメージを受けた。

要は意識の低さをどう改善すべきか。これには、職人を含めた専門家本人の普段の努力と向上心が必要であり、また世の中からの支援や応援を必要としている。もちろん、彼ら自身の発奮に期待することも大事だが、ここに今日の科学技術の支援が必要となっている。今の科学技術はメジャーな社会生産活動にのみ奉仕しているかのようであり、ここにも視野をもう少し広げていただきたいものである。

(3) 第三の問題として、世論づくりがある。文化財の意味が（職人を含めた）専門家の内部のみならず一般人にも広く共有するものにしていくべきである。これは、生活が精神的に潤いや豊かさに浸れる充実したものとなることを意味し、また文化財にかかわる方々がむくわれる世の中となることを意味する。

そのためには、一番見落とされている「現代的条件とどうマッチさせるか」について取り組みがまず必要となる。例えば、民家の場合、古い家は住みにくくして、古い文化をじやまもの扱いにするのではなく、また工芸品にいたってただのコレクションマニアというだけでなく、生活の中に取り込んでいくことが肝要である。

そして問題を突き詰めれば、生活を如何にゆとりのあるものにしていくか、に尽きる。そのためには、逆に文化財に囲まれた生活が一番の効果的方策といえる。この他、いくつか方策を考えたい。

△ 文化財関係規則規制といったものはもちろん必要であるが、人と人のつながりや地域の活性化にむけてやはりプライドが育つものにしていくべきであろう。そのためには、コミュニケーションの活性化にむけて、住まい方を変えていくことが肝要である。合理的な戸建ての住まいや集合住宅で、人間の精神が潤うように種々工夫を建築学的に凝らしているが、そこに文化の香りを入れれば十分なのではなかろうか。また卑近に文化がなければ、生活圏を広げてアクティブになればいいだけのはずである。そういう意味では文化財に関する価値観をしっかりと形成したいものである。

最後に繰り返していえば、文化財がそばにあるという日常において人間性が育まれていくという長い目で世の中を見るようにしたいものである。

<2>. 文化～文化の香りの醸成 16.3

「文化財の保存・活用は地域における文化の香りの醸成から」

△ 建造物文化財以外の有形文化財に絞って文化財問題を述べます。

文化財については活用あつての保存を考えるべきかと思っています。今、文化財の活用としては、美術館や博物館での展示会や子どもへの美術・博物館鑑賞の促進、が進められています。しかしながら、いまだに低調であることはいまでもありません。これは、文化財イコール古いものイコール保管しておくもの、といった認識が残念ながら一般的に定着しているからかと思っています。

△ そこでまず、今日の事情について私の分析を二点説明します。

・第一に、文化財は寺院とかに保管されていて、あまり世間の目にふれないということがあります。また美術館や博物館出の展示会でもお寺さん所蔵ということで、あまり関心が高まってはいません。

・第二には、文化財を美術の観点から見ると土壌がありません。美術品ということになると（美術が明治以降の西洋美術を基調にしているためか）今風のものには鑑賞する機会が多いのに対して、文化財はいまひとつ市民への愛着といった点では遅れをとっています。

△ 上記二点をどう捉えるのか。これは、文化財が地味という訳ではなくもっと世の中に日の目を見せるべきことを示唆しています。よって改善としては、文化財をもっと市民生活の中に近づけることと、文化財の価値をもっとあげてを考えたくなります。具体的に記しましょう。

まずは、美術的価値をもっと見出すということから始めたものです。これは何も、教育機関にすべてを任すということではなく、ごく普通の日常生活において、美術的香りがするようになっていくべきということです。

次には、市民はもっと地域に目を向けるようにしていきたいものです。日常の地域での営みにおいても、文化財を感じるようにするにはどうすべきか。お寺側に対しては、文化財保全をもっと意識して欲しいと思っています。その意味では、昔の寺子屋ではありませんが、もっと行きやすい環境づくりが必要であり、加えて寺の所蔵品はお寺保管でなくても良いとして、最近盗難対策も兼ねて、地域歴史館や博物館・美術館といったようなハードの整備もまた必要かと思えます。

△ まとめてみます。要は、地域の中に保存と鑑賞を内在させて、市民には文化財愛着の醸成を狙うのです。このためにハードの整備ということになるかもしれませんが、何も新しい建造物に頼るのではなく、地域コミュニティセンターや公民館などの施設をできる範囲内で活用ということも考えることができますし、それこそレプリカで学校教育現場にも設置ということも考えられます。このように、地域全体に文化

財の匂いで満たしたいものです。これをもって、既存の博物館・美術館での展示会が生きてくるでしょうし、子どもへの文化財教育いきてくるというものでしょし、何よりも文化財への愛着が醸成されていくといえます

<3>. 文学館 16.10

「文学館の運営について」

△ 魅力ある文学館にするには私は、(富山市にある)文学館が市民の知的な憩いの場になればと常々思っています。こうしたニーズは文学館設立時に制定された運営基本方針にも盛り込まれ、「気軽に楽しみ学ぶ機会の提供」として文学のみならず文芸にも対象を広げ、文学をいつでも誰でも楽しく学ぶことができるようにと謳われております。

本来ならこれで十分すぎると思います。がしかし、文学を愛好する方々や興味ある方々以外の(割合多くの)市民には、なかなか文学館の理念が響きにくいように思います。これは、一般社会では(文学の)学びもさることながら、学びが自然発生的に湧き上がっていないことによるのではとっております。

△ そこで私は、学びが地域に根差して生活の営みから自然に滲み出てくるようにすべきであり、そのためには何をなすべきかを考えました。すなわち、我らの生活において、文学との触れ合い機会を増し、文学の雰囲気を感じるようにと思います。すなわち、

・雰囲気については、文学の雰囲気が満ちているエリアやスポットがほしい。

・文学との触れ合い機会を増すには、教育現場からの目に見えない下支えがほしい。

上記二点は文学館だけでできるものではありませんし、実現不能かもしれませんが、文学館の魅力はそうした日常生活からの理解が形を変えた総体となって多くの市民には一層響くことになるでしょう。

上記二点について、以下に具体的に説明します。

(1a) 富山市文化文芸ゾーンの香り創出

文学館の周辺地域に野外ウインドウショッピングならぬ文学館黒板で文学的な発信があれば、文学の匂いが地域に漂うと思えます。

(1b) 図書館との連携

富山市図書館では(ガラス美術館や建築作品スペースと共に居て図書文化の香りが倍増している)一過性でもいいから文学スペースを設けて何か関わりが形になればと思えます。図書館にとっても相乗効果が大きい期待できるかと。

(1c) 気楽に文学と接する人の場

館内の展示やそれ以外の事でも何か聞いてみたいと思った時、何か気楽にお聞きできる方がいておしゃべりできる場があると、館内のムードが一段と和むかと思えます。特別に人を配置するというでなくて。もちろん、関心ある方の友の会への入会は当然です。

(2a) 学校教育との関係づくり

例えば現代国語の最近の授業では文学作品を鑑賞し感性

を磨くことが少なくなり、また古典の授業では文学作品は知ってどうするといった感すらいただきます。これは教育関係の問題ですが、教育からの下支えがないと文学の感性が育ちにくいばかりか、文学よりも現実対応のスキル中心がめだつこととなります。こうした問題をより良き方向で解決するために、学校関係者と共に文学関係者との論議があれば状況が変わっていくかと思えます。

(2b) 子ども期からの情操の育成について

文学の理解には、人間同士の触れ合いや自然鑑賞などの基礎的な素養の育みが必要不可欠であることはいまでもありません。初等教育の現場や家庭において、健全な営みをむしる文学からアプローチすることを考えたいものです。未就学児では絵本、就学児では児童本を介してどんな働きかけが必要なのか、そんな視点があれば文学館の企画もより一層幅の広いものになるかと思えます。

△ 動機

私は、遅まきで文学が好きになった方ですので、いまにしてようやく文学がもっと身近になって、できれば家庭も含めて街全体に文学の香りが漂えばと願っております。富山県では文化・歴史の香りがする県をめざすなら、これにもうひとつ加えるのです。そんな意識で図書館や文学館にたまたま通っていると、何となく思いがもっと形になって、いつてみれば日常生活における文芸世界の支援というか市民サイドの文芸運動になればと思えます。この観点で文芸支援活動にコミットしたくなりました。そして、文学が市民にもとっと身近になるように。

<4>. 立山博物館

「博物館の運営について」 19.12

△ 一般に博物館(以後館)の運営に際しては、館における展示活動や学芸活動には来館者数あつてのものというコストパフォーマンスの考えが極度に先行しているように思う。このため、館においては入場者数増を目指して企画面で工夫を凝らし、情報宣伝をち密に行い、グッズ販売を改善し、などの手立てが講じられているが、それでも状況が概して芳しくなく、対応に苦慮しているのが一般論としての現状かと思う。

そこで、私は抜本的対応として、今一度、「館と県民」といった視点で館活動が県民生活に寄与する役割をじっくりと深堀し、館の活性化に向けた実現可能な方策を述べてみることにする。以下に、項目ごとに考えを記したい。ただし、出前授業や企画展などについては、各専門家におまかせしてここでは扱わない。

△ 議論

(1) 館を取り巻く状況一般

館の効用を入場者数のみで推し量ることとは別に、館を生活環境として文化醸成の一翼を担っていることに着目し評価していくべきと思う。そもそも生活環境の文化的充実とは自然環境や社会環境の大枠のもとで生活環境の向上に寄与する文化的満足度のことであり、これには地域や家庭における日常生活に加えて教育や事業体の社会営みを介した社会

貢献などから支えられていると考える。これより、館は社会における文化創造の縮図(あるいは世界)ともいえ、地域に点在した文化醸成の文化ホットスポットとすることができる。

(2) 立山博物館(以後立博)の根源的力の評価

上述の根源論をもとに立博がもつ根源力を以下の三点でもっと評価していきたい。

・第一は、立博は立山の自然と山の文化が県民の心の中にあると同時にこれらを可視化した世界であり、いうなれば立山のもろもろを県民の日常と結接しているのである。県民にとっては館の存在そのものが必用であり重要といえる。

・第二には、芦峯地域がそうした結接点を守り育てていることを評価すべきである。一般に地域づくりではすぐに金の落ちるシステムづくりのみになりがちであるが、文化をひたむきに支える姿勢こそが訪問者を含め県民には共感と感動を与えるのであり、また芦峯地域が支えているのである。

・第三には、立博の研究教育に関する学芸活動を高く評価すべきである。富山ではグローバルな日本海学の活動とあいまって、自然や文化の領域における立山学の存在も重みを増し、これまで同様大きな成果が上っている。今後もそうした学芸活動が継続発展できるよう支えていくべきである。またこうした動きを立山の問題だけではなく、全国の山の自然や文化に関して各地域間の連携かつ支援へと繋げていくべきかと思う。

(3) 具体的方策

一番になすべきことは、(県全体の)文化醸成について県民の意識向上とそれを支える地域学術の推進を図ることである。館の日常活動やイベント活動はいうに及ばないが、館と県民の距離を縮める策も「市民生活と館のパワーとの相互作用」として進めたいものである。以下に三点述べる。

(3.1) 県民から館へ：十年に一度の程度で短期の県民コーナーの設置。県民の立山観が今どのような状態にあるかを世に紹介し、時には分析もする。これには、子どもの絵画、短歌マニアの作品、小学生立山登山感想、などであろう。これに加えてもうひとつとして、一般には立山が富山を自然の猛威から守っているという認識について、これも立山観として、なぜそのような認識があるかを人間行動学も含めた科学的な検討があってもいい。ミニ講演会が開催されればと思う。

(3.2) 館から地域へ：街づくりの観点で立博を盛り上げるムード作りとして、全国における山岳信仰の方々(各地の間を含めて)との連携として、全国視点での捉え方の姿勢を持ちながら他地域からの関心をフィードバックすることによって、富山の文化をグローバルにかつ多様的に捉えることが可能となり、意義は大きいと思う。

(3.3) 館から県民へ：出前授業や大イベント開催で館が県民への直接アプローチはいうに及ばないが、私は、館の頑張りが自然と県民に伝わることを重要視している。そのためには、芦峯地域一帯が立山文化のメッカとして活性化することで県民の意識化が進むと思っている。もし金をかけるなら、例えば大辻山や礼拝山に向かう道に一里塚の設置(距離間隔は任意)や、立山道路面に茶色のラインを引く(道路管理との協

議困難か)などあってもいい。

(3.4) 日常を基本にした散策地域が何となく感じられるようなイメージ作りがあってもいい。いまある宿坊の遺構をもとにして、当時の光景をスマホ画面上にて各ロケーションで表示されるようなスマホ活用の意見は多いかと思うが、金をかけずにスマホでなく目に見えるムード作ることを狙うなら、(できれば)ポケットパークを作り、案内板を設けて、芦峯の雰囲気を作るのもいいのではと思う。そこには、それなりに目立つ(立山をイメージしたデザインの)一里塚のような塚であっても案内板を添えるだけでもいいと思う。

△ まとめ；以上の策には、立博の後ろに県民がいるということ念頭に置き、館と県民とで作る文化醸成につながればと思う次第である

■7. 健康、食

市民の暮らしを心身ともに健全化することを考える。これには健康問題や食の問題、運動(スポーツ)の問題があろう。ここに議論する。

<1>. 食育について 11.8

「家庭コミュニティづくりとしての「食」

概要；「市民・子供の健全な生活は人間の自然な営みから」と考えれば、今日的「食」に関する問題について街づくり・人づくりとしての検討が必要となる。と以前から思っている。こうした観点で表記問題を検討したい。

△ 食の問題について、健康の面や教育・文化の面からその重要性が指摘され、種々改善の方策が講じられている。最近では、社会に閉塞感が漂うのも、しっかりとした食生活が営まれていないからといった指摘もある。

そうした議論の背景には、周知のようにしっかりとした生活の営むことが出来なくなっているように見え、これが食の簡素化を生み出し、ひいては家庭のコミュニティをも希薄にしつつあるようにも思える。例えば、食事時間の短縮、インスタント食品の氾濫、緑もの野菜の敬遠、皮むき作業を伴う果物の敬遠、など、確かに知らず知らずのうちに食の簡素化が進んでいる。もうひとつの例として、「何ゆえに全員で食さないといけないのか」とか、「家庭料理の暖かさはコンビニの電子レンジでも同じ暖かさだ」、といったコミュニティ軽視の声が一部とはいえ若年層に横たわっている。

△ では、そのようなものの根源は何か。家庭食生活の簡素化やコミュニティ軽視の根源は今の効率優先社会に根ざしているものである。そして「食」が手間をかけないし時間もかけないことにより生ずる殺伐としたコミュニティに慣らされてしまった結果が今日の事態を招いたといっても過言ではなからう。

ならばどうするのか。多くの方はもちろん問題点をしっかりと把握しているのであるが、その次がなかなか踏み出せないでいる。これは理屈で追いつけ過ぎの結果の現われと見ている。改善は理屈ではなく、人間らしいごく自然体で向き合う姿勢が大事である。特に、大人の行動が大変重要であり、大人が子供に対して背中をみせればいいのではないかと。まず当たり前のことを確認したい。

次に、家庭コミュニティそのものの構築に向けて、まちづ

くりや地域づくりというコミュニティづくりを追い風として、地域環境を作っていきたいものである。これは、もちろん効率優先社会に対して、手間をかけ時間もかけるといったことから始めるコミュニティづくりともいえる。

△ 以上まとめてみると、我らは、間に合わせ的な「食」ではなく、じっくりと食する習慣を作り、これでもって家庭における「きずな」を強くし、またコミュニティをよりよい方向に築くことができよう。そのような観点で、皆さんとともに知恵を出し合いながら幅広いコミュニケーションにより自信を持つことから始めたいものである。あたり前のことがあたり前になることを望んでやまない。

<2>. 歯の健康 19.12

「歯と口の健康づくりを進めるにあたっての課題とその解決方策について」

△ 健康づくりは食生活の基本となる咀嚼から始まるという自明にもかかわらず、歯や口については歯の健康というよりも歯磨きで十分といった認識が多いのではと思う。何故か。歯については「健康的ですね」というよりも「きれいな歯ですね」とか「口臭に気遣ってますね」という言い方が多いように、体とは何か別な要因が先行するためであろう(美しい歯は憧れでもあるが)。そう考えると、健康づくりは歯・口を含めた五体すべてに気遣うプラスαな意識が必要といえる。

△ ここでは、県が進める各種の取り組みと重ならない方向で、「歯の手入れ」と「食生活での歯の扱われ方」について認識づくりとして考える。

第一は歯そのものであるが、歯や口について不十分な認識がある。歯は磨くものという認識があるために、歯のごみ(食べかす)をとるといった感覚が育ちにくい。口臭についても、歯の掃除があつてこそ、口が清潔に保たれば結果的に歯を守ることにもなる。歯の手入れの習慣化という観点で言えば、歯の健康運動がかなり功を奏していて、最近は学校でも食後必ず歯そうじをしている。しかし、職場となると、仕事優先で昼食後の歯の手入れがなかなか難しい面がある。歯の手入れの習慣化が完全に実現するよう、意識を変えたい。

第二は、三度の食事や間食のお菓子について食生活改善として考えるべきである。まずはお菓子を食した後も歯の掃除をすべきである。特にお菓子好きな方にとっては、のべ幕なしの食では食事後の歯掃除が台無しになってしまう。お菓子の食に際して歯のことを忘れてしまう感覚を改めたいものである。

次に、食材について。歯の健康とは直接関係ないように見えるが、歯による咀嚼が健康のもとであるならば、口にする食材も健康への配慮も当然であり、カルシウム摂取はいうまでもなく栄養のあるものや咀嚼の機能(噛むことで養われる筋力や歯自体の鍛え)を高める素材の摂取も当然である。生産側では食べやすい配慮が健康には時として仇となることもあるので、市民側との連携にも頑張ってもらいたい。あくまでも、自然の延長での食品づくりも体の健康や歯の健康にも寄与するであろう。

△ 以上は身の回りからの問題提起であり、具体的な取り組みでは学校も含め地域や家庭そして職場にて生活改善としてより一層啓発をしていきたい。もちろん、歯科医のマンツーマン対応も効果的である

<3>. スポーツ 11.09

「スポーツを親しむ環境づくり」

概要;明るい街には人の息づかいあり。街中に皆さんが外遊びでもいい、スポーツもどきでもいいから、街中に出て、スポーツを楽しんでいる。そんな光景が当たり前になるようにしたいものです。一人ひとりの気持ち方で変わると思っています。

△ スポーツに親しみ楽しむとはどんなことをいうのであろうか。それを可能にする環境とは何であろうか。そんな観点から考えを述べたい。

スポーツはなぜ愛好されるのであろうか。大人になってからスポーツを始める場合でも、健康のためとしても、やはりスポーツの楽しさを満喫するといったことではなからうか。また子供と一緒に遊んでやることもまた、大人の義務として世代間交流を楽しんでいるといえる。

では子供の場合にはどうか、家族で外遊びや、地域で外遊びすること、(学校のクラブ活動も)がそもそものスポーツへとつながって愛好となると考えられる。しかしながら、子供のときの遊びについては、外遊び場の減少も手伝って昔のときのような外遊びがITのゲーム遊びに変わり、体を動かすことの面白さ、チームメイトとの感動の共有など、縁遠くなってきている。また、家族での遊びもまた受験勉強においやられて、世代間の交流そのものも怪しくなっている。

こうしたことが、大人になって、体を動かすことを嫌がり、見るスポーツにさえ関心をあまり示さないようになるのではと危惧している。(なでしこジャパンの活躍には本当に多くの方が感動したが)

△ このようにみると、スポーツを親しみ楽しむには、小さいときからのコミュニケーション環境の成熟度にかかっているように思うので、スポーツに親しみ楽しむ環境づくりは、まさに子供の環境については家庭環境から始まると考えられる。大人がスポーツを楽しむ場合においても、家庭環境の成熟があつてのものであり、単に個人で勝手にスポーツをやっているように見える場合でも、そうしたところにしっかりと関連付けがあるものである。よって、大人と子供の専用スポーツ施設も大事ではあるが、家庭環境いや地域環境の面からもスポーツ視点で整備していくべきである。

ではどんなことをするのか。いつでも・どこでも・だれでもが街においてスポーツのスポットを作り、スポーツを楽しむことではなからうか。公園も単に作られた遊具の設置ではなく、遊びがスポーツに転化するような多少なりとも広さのあるものであったり、文字通りスポーツ談義に花を咲かせるスポットであったり、何の変哲も無いスペースでスポーツたむろするといったところであろう。また、住まいでも庭にそんなスポットの様相があれば良いし、庭なし住居でも部屋がそんな機能を持ち、そこで楽しめば良いのではなからうか。そうすることによって、体を動かし、コミュニケーションを

楽しみ、感動を共有するといった、いわゆるスポーツ本来の効用がスポーツの親しみと楽しみを醸成することにつながるはずである。さすれば、地域コミュニティもより一層育まれ、スポーツの健全な愛好が自然とすすむ。

△ とにかく街中で外遊び的なスポーツスポットをどう作り、そこでどうスポーツを楽しんでいくのかを、皆さんと共に考えたいものである。親しむスポーツとはとにかく身近から。街中にてスポーツを楽しむ光景が当たり前になるようにしたいものである。「とにかく皆さん、体を動かして外に出ましょ」として、意識改革とはいわれないまでも、そんな「のり」ももうちょっとで定着するのではないか。そんなことを考えている。

■8. 他

<1>. 動物愛護問題 17.5

「動物愛護を人間世界の生命尊重として考える」

動物愛護に関して、ここでは根本に立ち返って、動物と人間との関わりそのものの健全化を念頭におき、人間世界の生命尊重について言及したい。

まずは基本理念から。人間は、生命体であるがゆえに、生命には日常意識しなくても尊厳として常に思っている。これが、他の生命の尊重ともなり、精神的にも影響を及ぼしあうものと考えられている。

ところが、最近、この感覚が怪しくなりつつあるように思う。人間はかわいさやものめずらしさで愛玩動物を飼育していても、そのうち飽きがかたり手に負えなくなったりすると、いとも簡単に動物との関係を絶つのである。これは、人間の身勝手そのものが問題であることを意味し、人間世界の問題として改善が図られるべしと考える。

自然界では人間は謙虚になるべきかと思う。人間が自然界の頂点に立っていたものがいつの日にか莫大なエネルギーを手にし、自然改変の技術などの文明を持った。そんな時代に入ってから、自然界のシステムを超越してしまい、その意味では自然界の生命にはうとくなり、動物が食物や偏狭な愛玩の対象となってしまったとみている。

また、地球は人間だけの独占物ではないことは自明であるだけに、人間をどう自然の摂理の世界に引き戻すのかが問われている。これには、人間の自制やバランスが必要とはいっても、具体的な行動が日常に伴わない限り、立ち行かないとみている。

ではその行動とは、身近に生命を感じ、身近に人の尊厳や人格を感じとることで、動物が人間の日常生活に入り込むことが肝要といえる。しかし、実際には動物愛護の基本を言及するよりも、事態は身勝手さをどう取り繕い人間を満足させていくべきという方向に流れ始めている。そのさいたるものが、最近浮上してきた人工物での代用という愛玩ロボットの存在である。福祉の分野では効果が上がっている。だからといって健全者家庭や地域でも右ならえの強要は困るのであり、人間の身勝手さを後押しする流れに対して、もっともっと生命を感じ取る世界の充実を本来の意義として文化を創

っていくべきかと思う。そしてまた、そんな姿勢で日常生活を送ることこそ、一番と考える。特別なシステム構築は要らないのである。

以上、動物愛護として、日常を充実させる行為をごく普通に楽しみ大切にしていきたいものである

■9. おわりに

地元で長い間住んでいると「これは、あれは」といったように気になることや願望が特別に意識はしてなくてもいくつも沸き上がってくる。これらをやはり書き留めなくてはとの思いをもって、書留出すと、面白いもので逆に触発されることも結構ある。こうなると書き留めることが面白くなり、気がつくとは結構な量になった。そうこうして、提言集その2が出来上がったわけである。

こうして書いてみると、多くの方々との議論が根底にあることに気づく。関係各位には記して謝意を表します。